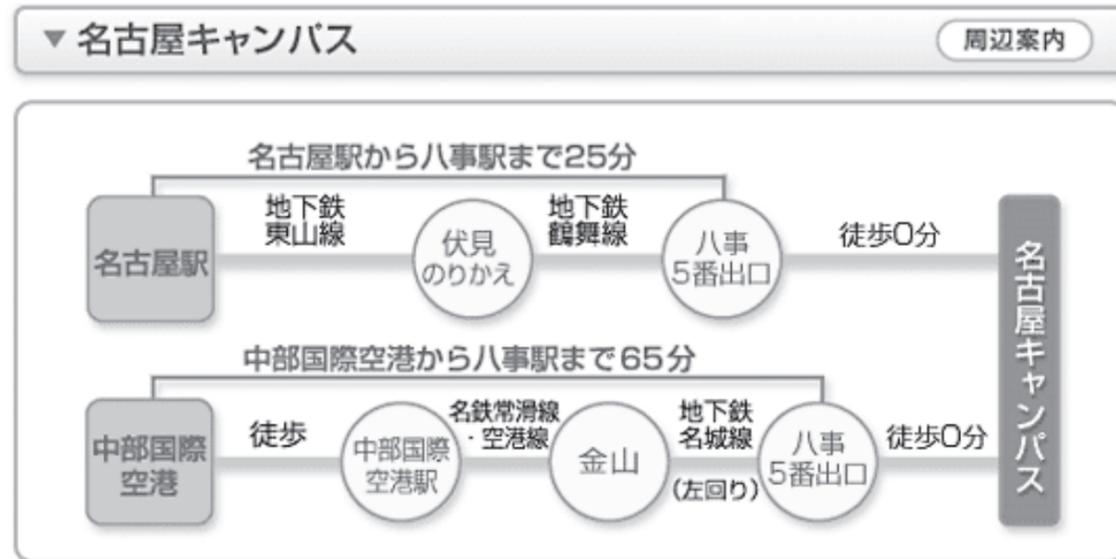


中京大学名古屋キャンパスへのアクセス



〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2 TEL(052)835-7111

懇親会のご案内

会場：エルバ亭（中京大学名古屋キャンパス3号館1F）

会費：5,000円

※中京大学の学内レストランです。

愛知県名古屋市昭和区八事本町101-2

連絡先電話番号 TEL 052-831-9328

所在地 名古屋キャンパス / 3号館 / 1F

懇親会会場「エルバ亭」案内図



大会準備事務局

〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町101-2 中京大学 梅正行・武井暁子

ディケンズ・フェロウシップ日本支部事務局

〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1 東京女子大学 現代教養学部 原英一研究室内

電子メール：hara12cdfj48@***** TEL 03-5382-6348（原研究室）

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
2009年 春季大会

Spring Conference 2009
Japan Branch of the Dickens Fellowship
at Chukyo University

日時
2009年6月20日（土）
June 20, 2009

プログラム

会場
中京大学
231教室
Chukyo University
Room 231



理事会 13:30 ~ 13:50 (233教室)

開会 14:00 ~ 14:15

開会のことば 原英一（日本支部長）

第I部 研究発表 14:20 ~ 15:20

司会 宮丸裕二（中央大学准教授）

1. ディケンズと慈善

豊橋技術科学大学准教授 田村 真奈美

2. 厄介なる遺産

——『ハード・タイムズ』と『北と南』から『素敵な仕事』へ

釧路公立大学准教授 市川 千恵子

***** 休憩*****

第II部 シンポジウム 15:40 ~ 18:00

司会 東京女子大学教授 原 英一

「ディケンズと現代作家たち」

ディケンズとR・キプリング

流通経済大学教授 桑野 佳明

ディケンズとV・S・ナイポール

東京大学准教授 齋藤 兆史

ディケンズとベン・オクリ

中京大学教授 梅 正行

懇親会 18:30 ~ 20:30

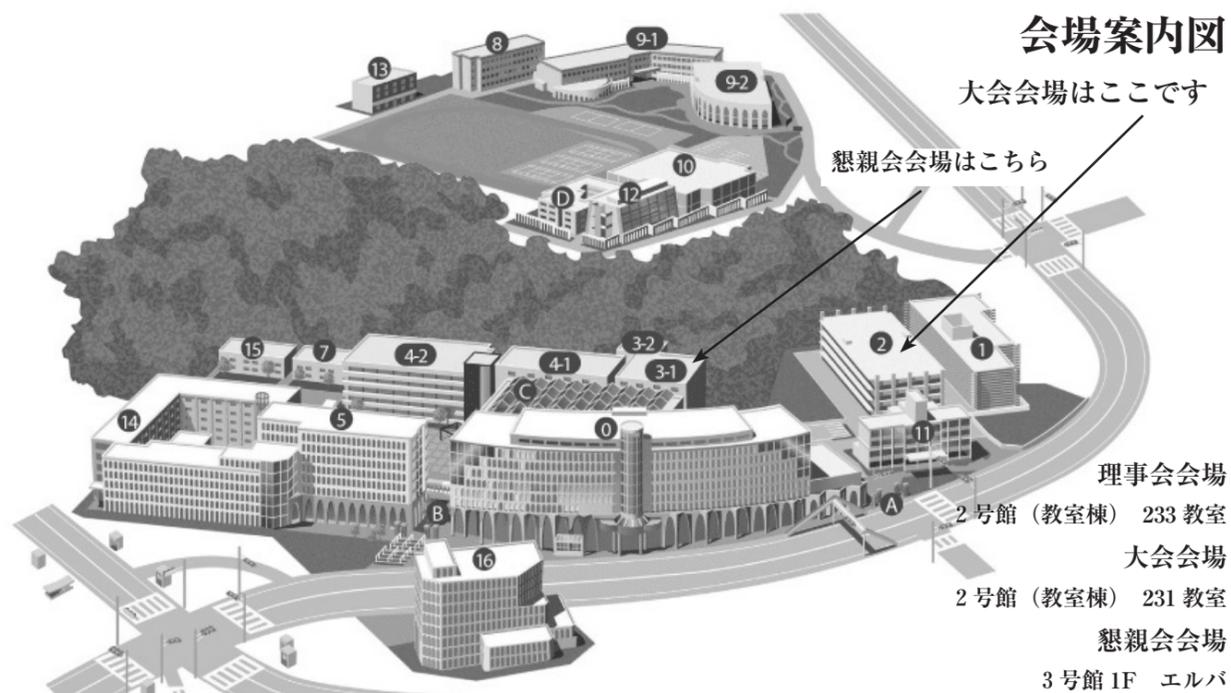
会場：エルバ亭（中京大学名古屋キャンパス3号館1F）

会費：5,000円

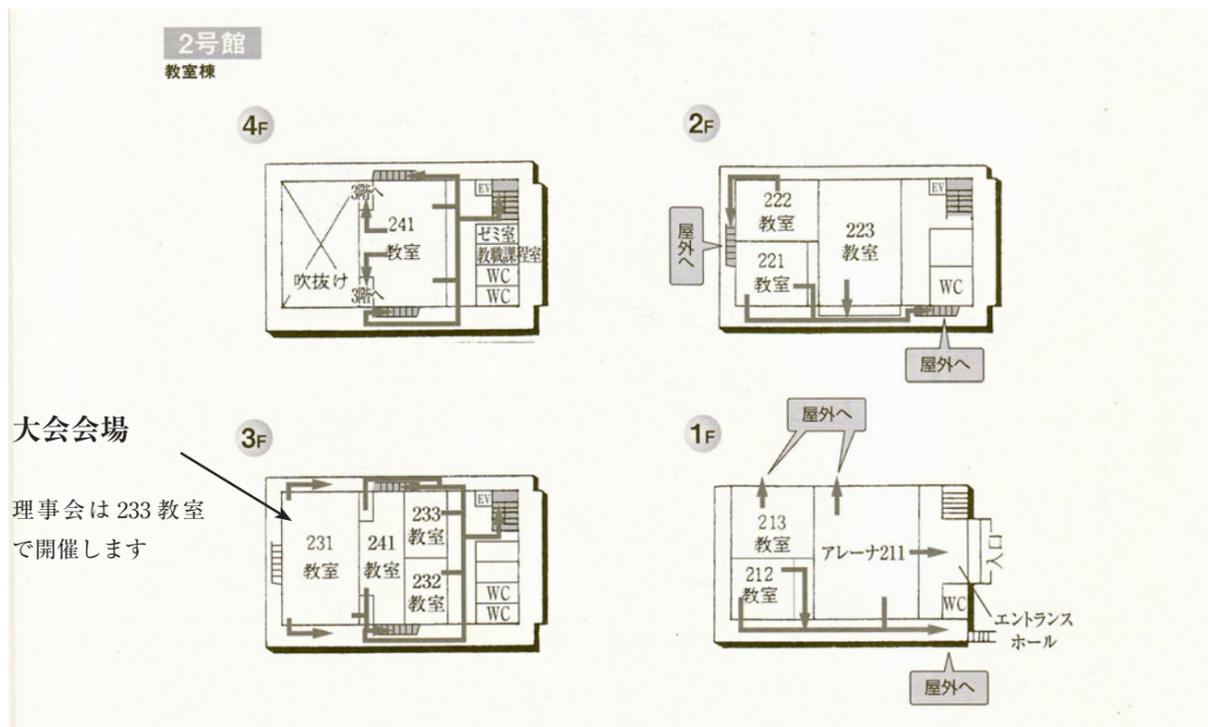
※会員以外の方も自由にご来聴ください。

中京大学

会場案内図



- 0 0号館 (センタービル)
- 1 1号館 (図書館)
- 2 2号館 (教室棟)
- 3-1 3号館 (教室棟)
- 3-2 3号館別館 (研究棟・心理学部)
- 4-1 4号館中館 (教室棟)
- 4-2 4号館西館 (教室棟)
- 5 5号館
- 7 7号館 (教室棟)
- 8 8号館 (教室棟)
- 9-1 9号館 (研究棟・法学部)
- 9-2 9号館 (教室棟)
- 10 10号館 (体育館)
- 11 11号館 (本館)
- 12 12号館 (体育館)
- 13 13号館
- 14 14号館 (研究棟・文 国際英語
総合政策 経済経営 商学部 教養部)
- 15 15号館 (会議棟)
- 16 16号館 (アネックス)
- A 正門
- B 西門
- C ガレリア
- D クラブハウス



研究発表 Papers

ディケンズと慈善

Dickens and Charity

田村 真奈美 Manami Tamura

18 世紀後半から 19 世紀にかけての英国における女性による慈善活動といわゆる ‘separate spheres’ についての研究が、現在盛んに行われている。この慈善の研究において、しばしば言及されるのが『荒涼館』の Mrs. Jellyby であり、彼女についての Esther の批判 (‘it is right to begin with the obligations of home’) である。このように女性慈善家を否定的に描いたために、慈善活動は女性が公共圏に参入する機会を与えた、とする立場の研究者に Dickens はあまり評判が良くない。本発表では、今日の慈善研究における紋切り型の Dickens 批判をまず疑うことから始め、『荒涼館』を当時の慈善活動の実態を踏まえて読み直し、Dickens と慈善について考察したい。

厄介なる遺産

——『ハード・タイムズ』と『北と南』から『素敵な仕事』へ——

Awkward Expectations: from *Hard Times* and *North and South* to *Nice Work*

市川 千恵子 Chieko Ichikawa

チャールズ・ディケンズの『ハード・タイムズ』(1854) とエリザベス・ギヤスケルの『北と南』(1854-55) はともに、女性と労働者という周縁的な存在を中心におき、19 世紀中葉の産業社会における「二つの国民」の問題を提示した。両作品とは時空を隔てたデイヴィッド・ロジャの『素敵な仕事』(1988) は、「ヴィクトリア朝的価値観への回帰」を謳ったサッチャリズムの圧力下にある教育界と産業界をコミカルかつリアリスティックに描きながら、その各章のエピグラフにヴィクトリア朝の「産業小説」からの引用を掲げ、「ポスト・ヴィクトリアン小説」と呼べる要素を備えている。本発表では、『北と南』と『ハード・タイムズ』に書き込まれた「二つの国民」を再検証したうえで、『素敵な仕事』に描かれる 1980 年代の英国社会に、19 世紀中葉の「二つの国民」の問題がいかに痕跡を留め、あるいは変容を遂げているのかを考察したい。

シンポジウム 「ディケンズと現代作家たち」

司 会 東京女子大学教授 原 英一
流通経済大学教授 桑野 佳明
東京大学准教授 齋藤 兆史
中京大学教授 梅 正行

ディケンズと R・キプリング
ディケンズと V・S・ナイポール
ディケンズとベン・オクリ

R・キプリングの作品を読んでいると、ディケンズの世界にいるような気になることがある。
V・S・ナイポールの作品を読んでいると、トリニダードのポート・オブ・スペインがロンドンのように見えてくることがある。
ベン・オクリの作品のマジックリアリズム世界の道端のふとした扉をあけると、いきなりディケンズ世界に入り込んでしまいそうな錯覚にとらわれる。
そうした印象の背後にあるのは何だろうか？
ディケンズか？キプリングか？ナイポールか？オクリか？それとも、小説というジャンルの負う宿命を、われわれはただなぞっているだけなのか？
小説というジャンルのスイッチを押すと、それぞれの社会の激動期に生きる「われらの生き様」をうつす語り駆動しはじめるというのなら、まず、時空を異にするこの三人の作品を精読する。その先にディケンズがいる。この不思議の意味を問う。